15　オランダにおける日本研究

森　由美（シー・ディー・アイ）

(1)　歴史的概観

日本とオランダの交流の歴史は古く、17世紀初頭にまでさかのぼる。オランダは当時オランダ東インド会社を設立し、これに貿易・軍事・外交・行政の独占権を与え、積極的にアジア進出を図っていたが、日本へも足をのばし、1609年にはオランダ東インド会社の商館を平戸に設けている。1639年以降日本は鎖国政策をとり、外国人の渡来・貿易を禁じたが、その体制下においてオランダはヨーロッパ諸国の中では唯一通商を認められた国であった。

平戸、次いで出島に移ったオランダ商館にはさまざまな人々がやって来たが、彼らの手によっていくつかのすぐれた日本関係の書物が著された。

Francois Caron による『日本大王国史』(1646年)、オランダ商館のドイツ人医師 Engelbert Kaemper による『日本史』(1727年)、Hendrik Doeff による蘭日辞書『道訳法児馬』(Dōyaku Haruma) (1816年) などが有名である。

しかし、なかでもオランダの日本研究の発展に最も貢献したのはシーボルト (Philipp Franz von Siebold 1796—1860) であろう。彼はドイツ人であったが、オランダ商館医員として1823年から1829年まで日本に滞在し、長崎郊外に鳴滝塾を設けて多くの蘭学者を育成した。帰国後、『日本』(Nippon, Arhchiv zur Beschreibung von Japan) を編纂し、1832—1858年の間にライデンで出版した。また彼の持ち帰った膨大な民族学的資料は、ライデンの国立民族学博物館の重要なコレクションとなっている。

シーボルトがライデンで日本の資料の整理・編集をした際、これを手伝ったのがヨハン・ヨゼフ・ホフマン (Johann Joseph Hoffmann 1805—1878) で、彼は1856年ライデン大学の初代日本語教授となった。1876年までその席にあり、その間1867年に『日本語文法』を出版している。それは当時としては学問的価値の高いものであり、イギリスの日本学者アストン (Aston) やチェンバレン (Chamberlain) が現れるまでヨーロッパにおいて標準の文典とされていた。

ライデン大学において次に日本語教授となったのはマリヌス・ド・フィッセル (Marinus W. de Visser) で、1917年に任命された。彼は『日本の古代仏教』を著し、仏教研究を中心にその他日本の民俗学的研究などを行った。

第3代の日本語教授は仏教学と日本語をはじめとして他の多くの言語に造詣の深かったヨハネス・ラーデル (Johannes Rahder) で、1931年から1946年まで講座を担当した。

ラーデルの離職後、当時ライデンの国立民族学博物館の日本部門の助手をしていたフィリ

ッツ・フォス（Frits Vos）が日本語の講師に任命された。彼は「伊勢物語の研究」で1957年に学位を得、翌年日本語・朝鮮語の専任教授となった。そしてその後、1969年のライデン大学日本学研究センター（Japanologisch Studicentrum—1978年に日本学・朝鮮学研究センター Centrum voor Japanologie en Koreanistiek と改称）の設立と同時にその所長に任命され、1983年12月に退職するまでに数多くの後進を育成した。

ユトレヒト大学でも日本語が教えられた。オランダではかつてインド学はオランダ領インドネシアの役人のためのトレーニングを意味していたが、「ユトレヒト大学インド学研究基金」(Fund Behalf of Indological Studies at the State University of Utrecht）が、1930年日本語・日本文学の特別講座を設けた。

最初の講座担当者は、万葉集の研究で1929年に博士号を得たばかりのヤン・L・ピールソン（Jan Ladewijk Pierson Jr.）であった。しかし彼は1933年に辞任し、その後の2年間はインド法が専門のHarmer Westraによって日本語が教えられた。1935年、日蘭交渉史と日本美術（木版画）を専門とするカーレル・C・クリーガー（Carel Coenraad Krieger）が日本語と日本文学の講義を担当することとなった。しかし1948年彼は極東の美術史の臨時教授に任命され、日本語・日本文学の講座は閉じられた。

(2) 現状

ア 大学等

(あ) ライデン大学 日本学・朝鮮学研究センター Rijksuniversiteit Leiden, Centrum voor Japanologie en Koreanistiek

Frits Vos が長くセンター長を務めていたが、1983年末で退任し、現在は W. J. Boot があとを継いでいる。このセンターの日本研究部門はオランダ唯一の日本学センターとして機能しており、語学、古代文学、漢文、現代文学、歴史、哲学、宗教、蘭学を中心とした日本研究が行われ、特に言語学的な文献上の研究が主体となっている。

現在当センターのスタッフとして、

Boot, W. J. 所長 歴史 江戸時代の思想史

De Poorter, E. G. 講師 古典文学・能

Tjoa, M. L. M. 講師 歴史・日韓関係史

Walraven, B. C. A. 講師 宗教史・韓国のシャーマニズム

Barres, G. 講師 日本史

Scholten, J. 講師 近代日本文学、蘭学

Van Gulik, W. R. 特別講師 日本美術と文化

Radtke, K. 講師 近代日本史

Verwazen, F. 講師 日本の法律

Lamer-Shin, S. J. 韓国語講師

Oloy, A. 図書館員

Kunimori, M. 日本語講師

Fukae, M.　日本語講師

が在籍している。

ライデン大学では、以前は日本の修士に相当するドクトランダスまでを最低6年かけて勉強するという少数精鋭的な日本研究が行われていたが、1983年から Two phase structure、いわゆる2段階構造の制度に変わった。これは最初の4年間は入学者は全員受講できるが、後の2年間は優秀な学生だけが受けられるというもので、この結果多数の学生の受け入れが可能となった。1960年代ライデン大学で日本研究を志す学生は1学年10人程度であったが現在では1年生約150名程度に急増している。

（い）　エラスムス大学 Erasmus Universiteit Rotterdam

1984年から経済学部で近代日本に関する2年間の日本研究プログラムが開始された。このプログラムは、①経済・貿易（日本や西洋の経済活動の構造・過程の差異と類似の分析を含む）、②日本語、③日本社会における現代の問題点（たとえば日本と周辺世界との関係あるいは戦後日本の活動のルーツ、日本のアウトライン等）の分析の3領域にわたって行われる。経済学部に所属するが歴史学、社会学、哲学、社会心理学などの分野とも関連したインターディシプリナリーな研究であることを目指している。

J. A. Stam 以下10人以上の教師陣が授業を担当している。

（う）　アムステル大学

人類学部で Van Bremen, Jan Gerhard が人類学的アプローチの日本研究を行っている。

（え）　ユトレヒト大学

法律学部では Peeters 教授が法律学の領域で、比較法律学の観点から日本研究を行っている。

（お）　国立民族学博物館：ライデン

日本部で Willem R. von Gulik が浮世絵の研究を行っている。

イ　学会等

1976年オランダ日本研究学会（Naderlands Genootschop voor Japanese Studien）が創設された。初代会長は Frits Vos で、1982年以降は Willem Robert von Gulik に引き継がれている。オランダの日本研究者を包括し、随時ではあるが学会誌も発行している。

また1983年アイサック・エイリアン財団が設立され、日蘭研究の研究者に奨学金が出されている。

一方日本では1975年1月、日蘭学会（Japan-Nederland Institut）が設立された。この学会は日蘭関係だけでなく、日本およびオランダの文化・言語・歴史その他の諸分野に関する総合的な研究の奨励、知識の交換を行い、両国の文化・学術の振興と向上を図ることを目的として設立された。当初よりライデン大学と深い関わりを持っており、現在ライデン大学との共同プロジェクトとして日光東照宮オランダ燈籠、バタビヤ城日誌の研究を行っている。

ヨーロッパにおける日本研究は文献学（フィロロジー）の伝統に立つといわれ、19世紀半ばごろから各地の諸大学・学士院で始まっている。これは日本に関する貴重な古典的文献が

ヨーロッパ諸国の大学や図書館に多量に保存されていることが背景となっており、その文献の保存・整理に際して日本語の修得が必要となり、それが文献学の伝統を生み出したといえる。

オランダにおいても同様で、ライデン大学ではシーボルトの資料の整理を手伝ったホフマン以降、文献上の研究を主体とした伝統が続き、学位論文の内容も宗教研究、古典文学研究等が多い。

しかし、近年日本の近代化を反映して、現代日本の研究にも目が向けられるようになった。1975年2月、アルンヘムの近くのオーステルビークで「ヨーロッパにおける日本研究シンポジウム」が、エラスムス大学の Pjotr Hesseling（政治経済）と J. A. Stam（経済）によって組織された。日本、オランダ、イギリス、ドイツ、オーストリアの関係者ら30余名が集まり伝統的な日本学の視野の拡大などが討議されたが、以後経済はじめ、法学、社会学などの面からの日本研究も行われるようになった。

(3) 課題と展望

第二次大戦中日本はオランダの植民地インドネシアを占領し、多数のオランダ人を強制収容したという歴史がある。また日本とＥＣとの貿易摩擦の問題もあり、現在オランダにおいて日本に対する一般人のイメージはあまり好ましいものとはいえない。また研究者にかぎっても、日本研究を始めるにあたっては日本を異国趣味の対象として視ることが多い。研究以前の問題ではあるが、日本の客観的理解を深めることが大切である。

近年ライデン大学等においても日本研究をこころざす学生が急増していることは裾野の拡大に大いに役に立つだろうと思われる。しかし今までの卒業生が少なく、その結果教師が足りないという。外国から専門研究員を招くしかないのではあるが、現在文部省は大学に対してお金をおさえており、状態は厳しいといえる。

また、ライデン大学日本学・朝鮮学研究センターでは日本の古典文学、能、日蘭交渉史等の分野の研究は相当進んでいたが、反面現代日本の総合研究が相対的に遅れていた。現在、K. W. Radtke が中心となって現代日本政治経済研究センター（仮称）Documetatiecentrum voor het huidige Japan の設立準備がすすめられている。これは現代日本の政治・経済に関する資料を収集し、政府機関、企業産業界および個人に情報を提供すること、またオランダをはじめ各国の学者、研究者の現代日本に関する研究への協力、推進を図ることを目的としているものであるが、このセンターの実現はライデン大学における日本研究を一層拡大するものと思われる。